

## 戦前生徒主事の「生徒指導」の陥穽 —松山高等学校・行元豊圓の思想と行動—

長谷川鷹士

### はじめに

1928年の「三・一五事件」、翌1929年の「四・一六事件」で生徒・学生に共産主義思想が広がっていることを把握した事を契機として、文部省は学生思想対策を強化していった。1928年には専門学務局に学生課を設置し、翌年には学生部に改組した。さらに1934年には思想局を新たに開設し、思想統制を一層強化し、戦時体制への学生動員を進めていった。

「思想善導」を目指すこうした動きを、各学校で実現して行くことになったのは生徒主事であった。従来の研究史では「思想善導」について中央の政策動向について多くが明らかにされているが、それを実際に担った生徒主事がいかなる思想を持っていて、どのようにその職責を果たしていたのかについては十分に明らかにされていない。しかし、「思想善導」という政策がどのように「実現」されていったかを明らかにするには、その担い手がいかなる意識のもとに職責を果たしていたのかを明らかにする必要があると考える。そこで本論文では松山高等学校を一つの事例として、同校の生徒主事であった行元豊圓がいかなる思惑から、「思想善導」に邁進したのかを検討する。

次に以上のような検討課題を考察するうえで松山高等学校と生徒主事・行元豊圓を対象とする意義を論じる。1930年代前半は多くの高等学校で生徒の「思想善導」が問題になっており、多くの生徒主事が「活躍」していた。行元はそれぞれの学校にいた生徒主事の一事例であり、「思想善導」政策を見るうえで特異な性質を持っているわけではない。それにもかかわらず本論文で松山高等学校と行元に着目するのは、行元の経歴が「思想善導」にとどまらないものであるからである。すなわち行元は1919年に岡山県師範学校の教員としてそのキャリアをスタートさせ、以降、弘前高等学校、松山高等学校、浦和高等学校と生徒主事に準ずる役職を歴任し、旅順高等学校長として終戦を迎える。そして、戦後は「教職追放」を受けることなく、愛媛大学に教育学担当教員として1958年まで勤務する。こうした行元の経歴からは生徒主事としての「思想善導」だけでなく、「教職追放」の対象の選定のあり方なども検証することができる。また行元は愛媛大学教授として「教職課程文理学部学生受講拒否」という「事件」も起こしており、教員養成史からみても興味深い人物である。こうしたいくつかの検討しうる観点を行元には見出すことができ、そして、こうした観点を検討する前提として、行元の生徒主事としての活動を明らかにすることには意義があるのである。すなわち松山高等学校の行元生徒主事について検討する事には「思想善導」を担った生徒主事の一典型を明らかにするという意義があると共に、戦後の「教職追放」や「教員養成理念」についての一側面を考察する前提を準備できるという意義がある。

次に先行研究について検討する。松山高等学校での行元生徒主事の動向についての先行研究は『愛媛大学五十年史』がほぼ唯一のものである<sup>1</sup>。そこでは「行元豊圓教授がまもな

く生徒監(のち生徒主事)に就任し〔1929年就任—引用者〕、強力な権限を手に入れて取り締まりを強化していくのである」とされ<sup>2</sup>、「軍国主義が台頭する社会風潮は学園においても無関係ではなく、配属将校や生徒主事が実権を握って教授会をリードし、管理と統制が徹底されてゆくのである」と配属将校と並ぶ「軍国主義化」の担い手として指弾されている<sup>3</sup>。確かに行元が果たした役割に関する評価としては間違っていないかもしれないが、何故、行元はそうした役割を果たせたのかを問うてみる事は「思想善導」の実相を明らかにするうえで有効であると筆者は考える。

最後に本論文の検討課題を示す。第1に行元の著述などを分析し、行元の思想を検討する。岡山県師範学校や弘前高等学校、松山高等学校での著作物や言動を分析することで『愛媛大学五十年史』で描き出される「軍国主義」という論理だけにはとどまらない行元の行動原理を明らかにする。第2に松山高等学校において行元がいかなる「思想弾圧」をしていたのかを検討する。松山高校の同窓会誌である『真善美』を主な資料として、行元が生徒に対してどのような指導をしたのかを検討する。以上を通じて「軍国主義」化を推し進めた行元がいかなる論理でいかなる行動をしていたのかを究明する。

## 1. 行元豊圓とは何者か

### (1) いかなる性格であったか

行元の「思想善導」を検討する前に、まずは行元がどういった性格の人物であったかを検討する。行元は愛媛県出身で1915年に第七高等学校造士館を卒業している<sup>4</sup>。行元は在学中に九州帝国大学主催弁論大会に出場し、その演説は「殉教者」というタイトルで「青年雄弁演説家諸君の代表的演説」として『雄弁』第6巻第7号(1915年)に掲載されている<sup>5</sup>。「真に同胞人類の為、国家社会の為め、更に大にしては宇宙進化の為、喜びを以て熱愛を以て、その大なる建築を築き上げる完全な煉瓦の一枚にならうと思ひます」と大仰な使命感を示す演説であった<sup>6</sup>。行元はその後、京都帝国大学に進学し、小西重直の指導を受け、1918年に「性慾教育論」という論文を出して、卒業している<sup>7</sup>。京都帝大での同級生には鱒坂〔小原〕国芳がおり、小原は「行元方円兄。ホントにいい人でした。学問も中々できる人でした。〔中略—引用者〕目下、松山大学の教育学担当。地方大学にも、かかる立派な教育学の先生の居られることは全く日本の力です」と称賛している<sup>8</sup>。1918年の教育学教授法専攻の卒業生は7人いるが小原が主席で行元は次席であり<sup>9</sup>、「学問も中々できる」という評価も妥当だと思われる。

京都帝大を卒業した行元は岡山県師範学校に赴任し、1920年に「師範学校生徒の思想に関する調査」を発表する。その内容の分析については拙稿<sup>10</sup>に詳しいが、ここでは同論文中行元が示している生徒の思想に対する態度を取り上げる。行元は「師範学校生徒もいつまでも消極的で退嬰的で盲従的である筈がない。虐げられた者は早く眼醒める。圧へつけられた者の反抗は一層強力である。社会も為政者も国家将来の大局に目を注ぎ彼らの真の要求を察して、物質的精神的の大なる自由と向上発展の機会を與ふるやう努力しなくてはならぬ」と述べている<sup>11</sup>。視点は生徒側ではなく為政者側ではあるが、生徒の思想運動に一定の理解

を示している。

行元は岡山県師範学校の後、盛岡中学校・高等農林に赴任し、1924年には弘前高等学校教授に着任する。弘前高校での生徒の思想に対する態度について、小竹俊夫(1925年入学)は行元などの教員は生徒の社会科学研究について「会として認められないが個人の研究は自由という立場をとられたものと思われる」と述べている<sup>12</sup>。生徒の思想について比較的寛容な態度をとっていたと言えようか。同じく弘前高校で行元の教え子であった伊吹山太郎(1922年入学)は行元の性格について重要な証言をしている。伊吹山は「我々は先生に行元エルンストという渾名な奉った」としている。そして、「弘高生の間では先生の評判はよいとは言えなかった」とも述べている。生徒の間で評判が悪かった理由は「余りにもエルンストのためであろうか」としている<sup>13</sup>。「エルンスト(ernst)」とはドイツ語で「真面目な」などの意味だが、生徒の付けた渾名であるから「生真面目な」「堅物」くらいの意味であろう。

以上から行元は生徒の思想については寛容な態度をとっていたと言える。そして、「エルンスト」という渾名をつけられ、生徒からあまり好かれていなかったことから明らかなように、生真面目な性格であったといえる。

そうした行元の「生真面目さ」は松山高等学校でも変わらなかったようである。1930年5月に発行された『三光寮寮報』に行元は「自浄其意」という文章を寄せている。そのなかで行元は生徒の軽佻浮薄さが問題視されるなかで世間の悪影響から隔絶された全寮制度が計画されたとし、一高の「自治」の精神とは世間の悪風から隔絶された、質実剛健の精神であり、他の高等学校もその本質をこそ学ばねばならないと主張している。「生産過剰、は斯かる粗製濫造品たる浮噪輩に於てなり。信頼するに足る重厚堅実の真人、未だその多きに苦しめるを聞かず」と述べ、高校生は「重厚堅実なる真人」をこそ目指さねばならないと主張している<sup>14</sup>。こうした「理想の高校生像」を持っていればこそ、そしてそれが第七高等学校時代の演説から通底する行元の信念であればこそ、以下に検討するような「思想善導」が導かれたのであろう。次に行元の「思想善導」を検討する前提として、行元の社会情勢への態度を検討する。

## (2)「軍国主義者」であったか

『愛媛大学五十年史』が「軍国主義化」の尖兵に位置付けているだけではなく、『真善美』に掲載された回顧でも行元は「軍国主義者」として指弾されている。綱島衛(1937年入学)は「倫理の講義での熱烈極まる日本哲学の鼓吹、英米思想の徹底的排出は、若い未熟の青年の思想を養うという教育者としての責任は消えるものではあるまい」と厳しく批判している<sup>15</sup>。あるいは直接的に批判しているわけではないが、宮内健正(1931年入学)は「行元豊円先生。昭和六年。満州事変勃発。先生は異常に張り切っておられた」と記している<sup>16</sup>。あるいは片山貞志(1931年入学)も批判しているわけではないが「折も折生徒主事行元先生が、北一輝の日本改造論をかして呉れた」と記している<sup>17</sup>。生徒の回想だけでなく、行元の言行からも行元が時代思潮に棹差していたことは確認できる。行元は『教育と宗教』第1巻第3号(1929年)の「思想善導に宗教を活用するの具体案」に寄稿しているが、そこで行元は「国体の精華を清新に深解体認しつゝ純真なる宗教的信念を有する人々」が「思想善導」にあたっ

ていくべきだと述べている<sup>18</sup>。以上のように行元が「軍国主義」的潮流に棹差していたことは間違いない。その意味では「軍国主義」的潮流に乗って「自由主義」を弾圧した側面があったことは否定できないだろう。

## 2. 行元は何をしたのか

次に行元豊圓が松山高校の「軍国主義」化を推し進めたと言われる「思想善導」の実際を検討する。行元は「社会主義」や「自由主義」という思想を弾圧する事だけを目的に「思想善導」をしていたのだろうか。あるいはこれまで検討してきたようなある種の「生真面目さ」に基づいて「思想善導」、別の言葉を使えば「生徒指導」をした結果、「軍国主義」化に棹差したという側面はなかったのだろうか。以下、行元と生徒の対立が引き起こした「松山高等学校第二次ストライキ」(1930年6月発生)で問題視された行元の「思想善導」と戦時体制が昂進する中での行元の「思想善導」に分けて分析する。

### (1) 「松山高校第二次ストライキ」

「松山高等学校第二次ストライキ」で問題視された行元の「思想善導」を分析する前に、まず「松高第二次スト」について事実関係を整理しておく。1930年6月発生のものが「第二次スト」である以上、先行する「第一次スト」も当然発生していた。「第一次スト」は行元が松高に赴任する以前の1926年11月に当時の校長橋本捨次郎を相手取って行われた。橋本は同人誌の検閲や発行停止など制度の言論活動を統制し、生徒の反感を買っていた。大正デモクラシー期という時代背景もあり、市民父兄の援助を受け、「第一次スト」は生徒側の勝利となり、生徒側からは重い処分者を出すことはなく、逆に1927年には橋本校長は罷免され、金子幹太教頭が校長に昇格し、生徒監として行元が赴任することとなる<sup>19</sup>。橋本校長が罷免されたものの、生徒に対する思想的な締め付けは行元が引き継いで継続された。その結果、1930年6月、一生徒が恋愛問題を理由に放校処分を受けたことがきっかけとなり、「第二次スト」が発生した。しかし、時代状況も移り変わっていたためか、父兄市民の理解を得ることができず、「第二次スト」は生徒側の敗北に終わり、多くの退学処分者などを出す事になった<sup>20</sup>。

「松山高校第二次ストライキ」では教練中に脱帽した生徒の写真を警察に渡したことや創立10周年記念式典で思想問題を扱った飾りつけをした生徒の寮の部屋に無断で立ち入ったことなどが行元の「弾圧行為」として批判されている<sup>21</sup>。これらのみからすれば、行元の行為は思想的な弾圧である「思想善導」でしかなかったと考えると差支えないだろう。しかし、これは行元排斥に動いた生徒側の主張である。実際、行元は何をしていたのだろうか。行元の同僚であった木方庸助は1965年に喜寿記念で『凡人像』という半自伝的小説を書いている。この中で1930年の寮の飾りつけについて行元が批判している様子が記載されている。それは次のようなものであった<sup>22</sup>。

「あなたの組のはワイセツでいかん。いくら言っても言うことをきかん。行ってシメシをつけて下さい」と、生徒主事が来てギャンギャンいう。

創立記念祭の作り物。ライオン首相のキン縮政策を風したものの。

「傑作だ。が、ウィットもユーモアも解らぬ生徒主事に、わかれとといったって、無理だよ。縮み過ぎてキンが見えなくなったことにして、生徒主事の顔も立ててやったらどうだ。アクドクない方がいいともいえると、僕は思うな。風意がわかればそれでいい。キンにこだわる生徒主事も君等もどうかしてるんじゃないか」

木方が記憶している 1930 年の生徒と行元の対立はストライキを起こした生徒たちの主張とは異なっている。勿論、これとは別に生徒たちが主張するような「思想弾圧」を行元がしていた可能性は否定できない。ただし、この件については明らかにわいせつ物を掲示した生徒を生徒主事が指導するという「思想善導」とは呼びえない、通常の「生徒指導」であった。しかし、こうした通常の「生徒指導」でさえも、ある意味では生徒たちの皮肉をきかせた政治批判を抑圧してしまうという、予期せざる効果は持っていただろう。

ところで木方はもう一つ行元の生徒主事としての活動を考察するうえで興味深い証言をしている。1930 年の「松高第二次スト」が発生した際、「スト」を支援する卒業生が木方の自宅を訪ねてきたという。その際、卒業生は「生徒主事は「七生会」の会員だそうです」と行元が「皇国思想」を抱いていることを問題視したが、木方は「生徒主事の私事に立ち入りたくもない」「あの生徒主事は〔中略 - 引用者〕高い処で温情主義を歌ってる観がなくもない」と応じたという<sup>23</sup>。ここには「皇国思想」を抱いた生徒主事による弾圧という生徒側の図式と「温情主義」に基づく行き過ぎた指導という木方側の図式が提示されている。つまり、行元の指導を「思想」に引きつけて解釈する論理と「人格」に引きつけて解釈する論理双方が現れている。行元の指導は「思想」からのみではなく、行元の「人格」からも捉えなおす必要があるだろう。

## (2) 「松高第二次スト」以降の「思想善導」

「松高第二次スト」以降にも行元が「思想善導」をしていたという批判は『真善美』に見出せる。明確に行元の「自由主義」弾圧を指弾しているのは沢田允明(1940 年入学)である。沢田は「高校生活では酒が禁じられ、山岳部員が酔っていたというので、北川先生〔山岳部顧問一引用者〕は生徒主事に叱責され、自由主義を正しいと思うと公言されたのは北川先生だけであった」と述べている。さらに続けてその北川が戦後教職追放され、当時の生徒主事、行元が戦後教育学部教授となったのは「歴史の皮肉である」と述べている<sup>24</sup>。この沢田の発言を素直に読むならば、「自由主義」の弾圧というのは言葉が過ぎている。行元は規則を守らせようとしただけであり、むしろ「自由主義」という大義まで持ち出して規則やぶりを是認したのが北川であるというだけのことである。それにもかかわらず、何故、沢田はこの事例を北川の「自由主義」の証拠として取り上げたのだろうか。「禁酒」などの規則を破ることもいとわぬ「奔放さ」に旧制高校の「自由主義」の一端があると考えたためならば、その意味では確かに行元はそうした「自由主義」にとっての「弾圧者」であったと言えるだろう。

旧制高校の「自由主義」への弾圧を窺わせる記述は他にもある。玉野義雄(1939 年入学)は英語の教員、パーセルをアメリカに送る時に行元に叱責されたことを回顧している。日米の

関係が陰悪になる中、生徒達はアメリカ国歌を歌って、パーセルを見送った。これに対して行元が「米国の国歌を歌って送るとは何事か」と叱責してきたという。これだけならば国際主義的生徒達と国粹主義的生徒主事という話で終わりそうである。しかし、玉野は「それだけであれば良かったのであるが」と時局柄、学生食堂以外でのクラス会が禁止されていたにもかかわらず、すき焼き屋で度々クラス会を開いており、そのことが行元にばれて大目玉を食らった話を続ける。「その時は説論だけでは済まなくなり「叩頭して深謝する」というような趣旨の始末書を出して勘弁してもらった」としている<sup>25</sup>。この事例からは二つの事がわかる。一つは行元の行動原理、もう一つは旧制高校生の「自由主義」の実相である。前者について、行元は日米関係が悪化する中、アメリカ国歌を歌うという「思想」よりも、規則を守らず、すき焼き屋でクラス会を行う「態度」を問題視していたのである。つまり、行元の指導目的は「思想善導」にとどまらず「生活指導」にもあったことがわかる。後者について、旧制高校生たちは関係の悪化している国の国歌を歌えるという点で思想的にも「自由主義」であるが、規則があったとしても、それを破るという点でも「自由主義」的であった。そして、その両面を合わせ持つのが旧制高校の「自由主義」であった。

以上の検討を通じて明らかになったのは、松山高校の「軍国主義」化に行元が「貢献」した回路の複雑さである。行元の「思想善導」によってのみ、松山高校の「軍国主義」化が進んだわけではなかった。むしろ、通常の「生徒指導」を通じて、松山高校の「自由主義」は抑圧されていったのである。行元は規則遵守を求めている。創立十周年の飾りつけについてはその「ワイセツ」さを問題にしていた。沢田がいう「自由主義」弾圧の問題は飲酒禁止という規則を守らないことに対する指導であった。アメリカ国歌を歌うことよりも禁止されたクラス会を度々開いた事を問題視していた。先に見た行元の性格も合わせて考えると行元は「善導された思想」以上に「生真面目な態度」を生徒に求めているのである。

## おわりに

以上、行元豊圓が生徒主事としていかなる論理のもと行動し、どのような役割を果たしたかについて行元の性格に着目しながら検討した。以下、明らかになった事実を示すと共に、行元の論理と行動から見えてくる戦前生徒主事による「生徒指導」の陥穽を論じる。

第1に岡山県師範学校や弘前高等学校での行元の言動や生徒からの評価を検討し、行元の性格を分析した。結果、行元は生徒の思想には比較的寛容であり、「行元エルンスト」という渾名をつけられるなど、その「堅物さ」で生徒から好かれていなかったことが明らかになった。

第2に「松高第二次ストライキ」やそれ以降の行元の「思想弾圧」について検討した。まず「松高第二ストライキ」の際に指弾された「思想的飾りつけに対する弾圧」については、当時、行元の同僚であった木方が書いた文章を分析し、行元が問題視していたのは「思想面」ではなく、飾りつけの「ワイセツ」さであった可能性を指摘した。次に行元が「自由主義」を弾圧したという主張については、ここで問題にされている「自由主義」が規則を破ってでも飲酒をするといったレベルの問題であり、行元の「弾圧」は規則を守らせようとした「生

真面目さ」が原因であったことを指摘した。またアメリカ人教師を送別するためにアメリカ国歌を歌ったこと以上に、規則を守らずにクラス会を開催した事を問題視していたことを明らかにし、行元の生徒主事としての行動は「規則遵守」を求めるものであったことを指摘した。

以上が本論文で明らかになった点である。つまり、行元は「軍国主義化」の元凶であるように扱われているが、彼自身の行動の論理は「軍国主義」よりもむしろ「規則遵守」であった可能性が高いと考えられるのである。このことは行元が生徒主事として担当した「生徒指導」の陥穽の一つを示していると考えられる。すなわち指導自体は「規則遵守」という穏当なものであったとしても、歴史的文脈に照らし合わせた場合、「軍国主義化」という大きな潮流に掉差するものになってしまうことである。行元の場合、「高校生は飲酒をしてはならない」などの規則を遵守することを求めたのであるが、それが結果的には松山高校の「自由主義」の伝統を衰微させる方向で機能した可能性が高いのである。

#### 注

- 1 愛媛大学 50 年史編集専門委員会『愛媛大学五十年史』愛媛大学開学 50 年記念事業委員会、1999。
- 2 同上、p.7。
- 3 同上、p.13。
- 4 第七高等学校造士館『第七高等学校造士館一覧 自大正四年九月 至大正五年八月』、p.204。
- 5 行元豊圓「殉教者」『雄弁』第 6 巻第 7 号、1915、pp.128 - 134。
- 6 同上、pp.133 - 134。
- 7 京都帝国大学『京都帝国大学一覧 自大正七年 至大正八年』、p.417。卒業論文については京都文学会『芸文』第 9 巻 5 号、1918、p.85。
- 8 小原國芳『小原國芳全集 29 小原國芳自伝(2)一夢みる人一』玉川大学出版部、1963、p.49。
- 9 京都帝国大学、前掲、p.417。
- 10 拙稿「岡山県師範学校生徒の思想傾向に関する一考察—1919 年実施調査の分析を中心に—」『地方教育史研究』第 39 号、全国地方教育史学会、2018、pp.47 - 68。
- 11 行元豊圓「師範学校生徒の思想に関する調査」『心理研究』第 17 巻第 99 号、1920、p.308。
- 12 小竹俊夫「大正末期の北溟寮のことなど」旧制弘前高等学校同窓会『旧制弘前高等学校史』弘前大学出版会 2005、p.116。
- 13 伊吹山太郎「思い出の恩師」『同上』、p.154。なお井吹山自身は愛媛を訪れた際に墓参を試みるなど、行元に悪印象は抱いていなかったようである。
- 14 行元豊圓「自浄其意」松山高等学校三光寮『三光寮寮報』松山高等学校三光寮、1930、p.4。
- 15 網島衛「松高文科乙類—私の場合」松山高等学校同窓会『真善美』松山高等学校同窓会、1984、p.325。
- 16 宮内健生「私なりの松山高校」『同上』、p.244。
- 17 片山貞志「走馬燈」『同上』、p.249。
- 18 「思想善導に宗教を活用するの具体案」『教育と宗教』第 1 巻第 3 号、1929、p.33。

- 19 愛媛大学 50 年史編集専門委員会『前掲』、p.7。  
20 同上、p.13。  
21 同上、p.649。  
22 木方庸助『凡人像』あぼろん社、1965、p.283。  
23 同上、pp.284 - 285。  
24 沢田允明「戦争へ傾斜する日々」松山高等学校同窓会『前掲』、p.375。  
25 玉野義雄「あの頃あの先生」『同上』、p.347。